

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02559

研究課題名（和文）読解テキスト（ノンフィクション）の難度に基づく高等学校国語科カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of a high school Japanese language curriculum based on the level of difficulty of reading texts (non-fiction)

研究代表者

大滝 一登 (Otaki, Kazunori)

国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官

研究者番号：10544299

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、高等学校国語科の「読むこと」に関する資質・能力の具体の解明を目指し、ノンフィクション教材の難度に関する基準・指標に関する知見を獲得すべく、日本語教育に用いられている「文章難易度測定システム」等の成果を援用するとともに、高校生を対象とした実態調査を行い、高等学校国語科「読むこと」（ノンフィクション）のカリキュラムモデルの構築に向けた、ノンフィクション教材の難度に関する一定の知見を獲得した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、国語科教育学において先行研究のきわめて乏しい中、日本語教育に用いられている「文章難易度測定システム」等の成果を援用したり、高校生を対象とした実態調査を行ったりすることにより、文章（ノンフィクション）の難度に関する基準・指標の策定に資する知見の一端を獲得した。このことにより、高等学校国語科「読むこと」（ノンフィクション）のカリキュラムモデルの構築に向けた研究を前進することができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to clarify the specific qualities and abilities related to "reading" in the high school Japanese language class, and to obtain knowledge about standards and indicators regarding the difficulty of non-fiction teaching materials, we utilized the results of the "Text Difficulty Measurement System" used in Japanese language education, and conducted a survey of high school students to obtain a certain amount of knowledge about the difficulty of non-fiction teaching materials in order to construct a curriculum model for "reading" (non-fiction) in the high school Japanese language class.

研究分野：国語科教育学

キーワード：読解テキスト 難易度

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初は、義務教育に続き、高等学校学習指導要領が公示された直後であった。新学習指導要領においては、「資質・能力の育成」、「カリキュラム・マネジメント」などがキーワードとなっており、教師には、生徒に育成すべき資質・能力を見据えた上でカリキュラム開発を主体的に行うことが一層求められており、その際、発達段階等に応じた教材配列は重要な要素となると考えられた。

(2) しかしこれまでの高等学校国語科の指導においては、学習指導要領の改訂は教科書内容の変更を意味するものにとどまりがちであり、それによって指導を大きく見直さなければならない契機には必ずしもなり得なかった。特に、指導の中心となっている「読むこと」の学習において、教師は教科書の文章(読解テキスト)を順に取り上げればよく、個々の教材研究は行われても、それらをどう配列するかという点は教科書編集に一任されていたといえる。

(3) 一方、教科書編集に携わる研究者等からのコメントによると、教科書編集においても、テキストの難度に関する科学的な知見は必ずしも明確ではなく、この分野の研究の進展が必要だと考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、国語の読解テキスト(ノンフィクション)の難度に関する基準・指標に関する知見を獲得すること、を踏まえ、高等学校国語科のカリキュラムモデルの構築に着手することの2点にある。

### 3. 研究の方法

国語の読解テキスト(ノンフィクション)の難度に関する基準・指標に関する知見を獲得すべく、日本語教育学の研究成果の一つとして公開されている「日本語文章難易度判別システム(jReadability)」を用いて、ノンフィクションテキストの難度に関する調査研究を行い、その結果を考察することとした。研究に当たっては、先行研究が乏しいことから、まず、高等学校レベルにおけるテキストの難易度の指標の候補を複数設定し、高校生の読解とアンケートからその重要性や有効性等に関する知見を得ることを目的とした。研究方法としては、「日本語文章難易度判別システム」を用いて分析し事前に難易度が異なると判別された複数のサンプルテキストを高校生に読んでもらい、アンケート調査を行うとともに、その結果を踏まえたヒアリングを行った。

### 4. 研究成果

本研究は、コロナ禍により、高校生対象の調査の進捗に困難をきたしたが、予定していた学校のうち、一部の学校の協力を得ることができた。以下に最新の調査結果の概要を示すこととする。

#### (1) 調査の対象・方法等

調査については、協力が得られたX～Zの3校の第1学年又は第2学年計516名(有効回答者数507)を対象とし、令和5年9～10月に4つのテキストを読んでもらった上で、1人1台端末を用いたオンラインアンケートを行った。アンケート項目(抜粋)は以下のとおりである。

(略)

11. テキストAは、理解するのに難しかったと思いますか。

12. テキストAの中で、最も「難しい」と感じた文番号を一つ教えてください(数字のみ)。

13. 前問の一文の「難しさ」は特にどのような点にあると思いますか。簡潔に記述してください。

14. テキストA全体として、「難しさ」が強く感じられた点は何でしたか。(複数回答可)

知らない内容に対する親しみにくさ

内容自体の抽象性

内容・分野に対する興味のなさ

書き手の考えの複雑さ

論理の展開の複雑さ

学習していない語句の使用(論説用語など)

外来語の多用

専門用語の使用

人名・地名・プロジェクト名など固有名詞の多用

書き手の語りの複雑さ

比喩表現など技巧的な表現の多用

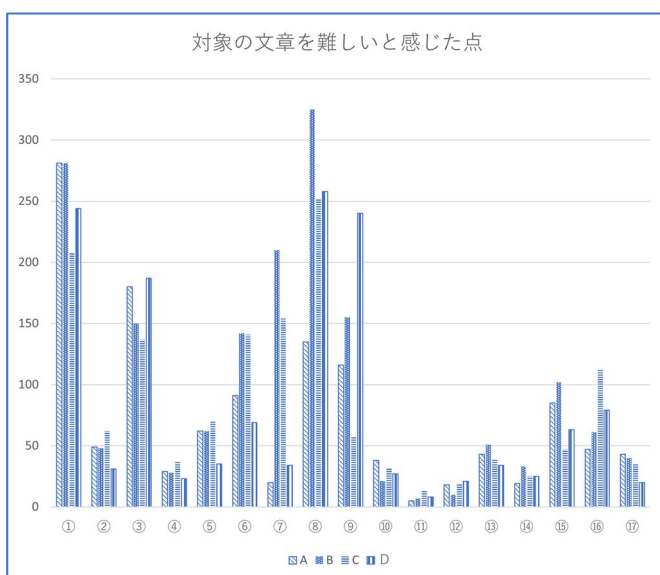
段落の構造の複雑さ

- 一文の構造の複雑さ
  - 一段落の長さ
  - 一文の長さ
  - 理解していない漢字の多用
  - 人間味の感じにくい文体
  - その他
- (略)

このような質問を各文章について問うとともに、いずれの文章を最も難しいと感じたかやその理由などについても尋ねた。また、アンケート回答後、学校が任意に選んだ生徒に対するヒアリング調査も行った。

## (2) 難しいと感じた項目に関する回答結果

3校のアンケート結果を集計したところ、対象とした4つの文章、及び「文章の難しさ」の判断基準について複数回答で尋ねた質問に対する回答結果は、以下のグラフのとおりであった。



各文章について難しいと感じた点についての回答としては、文章Aについては、「知らない内容に対する親しみにくさ」(281名)が最も多く、順に「内容・分野に対する興味のなさ」(180名)、「専門用語の使用」(135名)、「人名・地名・プロジェクト名など固有名詞の多用」(116名)と続き、語彙的要因よりも、興味のなさや親しみにくさが優先した。

一方文章Bについては、「専門用語の使用」(325名)の多さが顕著であり、順に「知らない内容に対する親しみにくさ」(281名)、「外来語の多用」(210名)、「人名・地名・プロジェクト名など固有名詞の多用」(155名)、「内容・分野に対する興味のなさ」(150名)と続き、比較的、語彙のハードルが高かったことがうかがえる。また文章Cについても、「専門用語の使用」(252名)の多さが顕著であり、多い順に「知らない内容に対する親しみにくさ」(208名)、「外来語の多用」(155名)と続き、「学習していない語句の使用(論説用語など)」(141名)、「内容・分野に対する興味のなさ」(137名)と続き、語彙のハードルと内容への親しみにくさが拮抗している。文章Dについても、「専門用語の使用」(258名)の多さが顕著である点は認められるが、「人名・地名・プロジェクト名など固有名詞の多用」(240名)も顕著である点が特徴的である。続く項目として、「知らない内容に対する親しみにくさ」(244名)、「内容・分野に対する興味のなさ」(187名)が挙げられる。

4つの文章とも回答数が低かった項目としては、「比喩表現など技巧的な表現の多用」がきわめて低く、「段落の構造の複雑さ」が続いたが、これらは行政文書であることを鑑みれば納得できるところであろう。

### (3) 文章の難度の比較に関する回答結果

4つの文章の難しさについては、以下の表のように判断された。文章Bが最も難しいと回答した生徒の割合が最も多く、文章Aが続く点はその学校でも同じであり、「日本語文章難易度判別システム」の結果とは矛盾しない結果となった。ただし、リーダビリティスコアが同じであった文章Cと文章Dとでは、学校や対象学年によって若干の差が認められた。特に1年生を対象としたY高校では、文章Bの難度が顕著に高く、文章Dの難度は他校に比して高くないと判断された。

	A	B	C	D
X(2年)	23.1%	36.2%	19.6%	21.0%
Y(1年)	17.7%	61.1%	13.7%	7.5%
Z(2年)	22.7%	42.6%	19.1%	15.6%
合計(人)	20.6%	49.1%	16.8%	13.5%

文章Bを選択した回答者の自由記述例としては、意味が類推できる漢語よりも、外来語の多用が読みのハードルとなったという意見が多かった。また、やはり興味や親しみのある内容の方が読みやすいという意見も多かった。文章Aを選択した回答者の自由記述例としては、論理的な展開だからこそ難しい、内容の親しみにくさ、文章の長さなどがハードルとなったという意見がみられた。文章Cを選択した回答者の自由記述例としては、国際的な話題や政治的な内容で親しみにくかった、漢語が多いため難しかった、などのコメントがみられた。文章Dを選択した回答者の自由記述例としては、内容に親しみにくい、要点が押さえにくい文章構成であった、事実が示されているが価値判断が難しかったなどのコメントがみられた。

### (4) 学習してきた文章の配列に関する意識

今回の生徒アンケートにおいては、本研究の問題意識である教材の配列の妥当性に関する項目も設けている。アンケート項目(抜粋)は以下のとおりである。

(略)

34. これまでの国語で学習した文章がどのように配列(学習する順序)されていたか、その理由を理解していますか。

35. これまでの国語で学習した文章の配列について、教師から十分な説明はありましたか。

36. これまでの国語で学習した文章の配列は妥当だ(学習しやすい)と思いますか。

37. これまでの国語で学習した文章の配列の理由として考えられるものは何ですか。(複数回答可)

用いられている漢字の難易度

用いられている語句の難易度

一文の構造の複雑さ

文章の論理的な構造の複雑さ

書き手の考えや思想などの複雑さ

子供の成長にしたがって求められる価値観や教養など

子供が飽きないようなヴァリエーション

その他

38. これまでの国語で学習した文章の配列や難しさとの関係について、自由に記述してください。

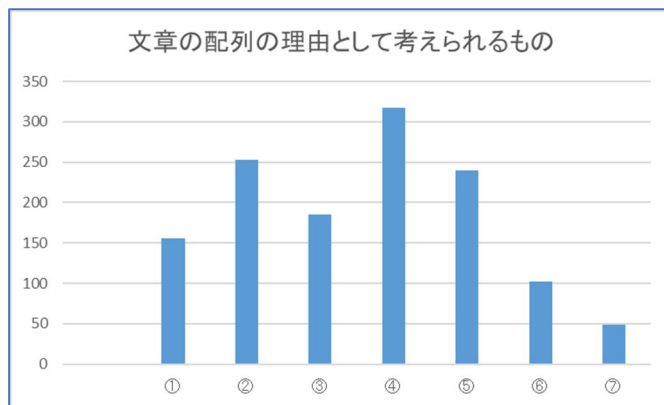
これらのうち、質問34～36の反応率は以下のとおりであった。

	1	2	3	4	5
質問34	14.3%	28.9%	31.5%	21.2%	4.2%

質問 35	6.3%	16.4%	30.5%	30.7%	16.0%
質問 36	2.6%	12.9%	37.2%	34.1%	13.3%

(1=全く当てはまらない 5=よく当てはまる)

生徒は教材の配列についておおむね妥当であり、教師から一定の説明を受けていると感じているものの、それらに比してその理由については十分理解しているわけではないと考えられる。また、質問 37 の回答結果をまとめると以下のようになり、「文章の論理的な構造の複雑さ」が最も高く、順に「用いられている語句の難易度」、「書き手の考えや思想などの複雑さ」、「一文の構造の複雑さ」と続き、文章の論理的な構造や語彙が配列に大きく影響しているとの考えを読み取ることができる。



#### (5) ヒアリング調査から得られた情報

アンケート後に行ったヒアリング調査では、主に、どの文章がどのような理由で難しいと感じたのかについて、改めて尋ねた。その結果については、記述回答と大きく異なるものではなかった。ヒアリングでは、オンラインアンケートとは異なり、「教師から学習の事前に、文章の難しさや特徴についてのアナウンスがあった方がよいか、ない方がよいか」という質問を行った。およそ7割の生徒が「ある方がよい」と回答した。

#### (6) 考察

本調査では、行政文書をテキストとしたが、日本語学習者を対象に使用されている「日本語文章難易度判別システム」の難度の判断とおおむね一致した点が特徴的であった。このことは、筆者の個性や時代の特性が強く現れ出る前回調査の文章に比して、こうした文章の方が、文章の難度に関する一定の指標の設定による分析が有効であることを示唆していると考えられる。このことは、語彙や論理の展開などに関する書き手の個性や多様性を一定の指標によって判断することの困難さを示すものでもあり、日本語学をベースとする「日本語文章難易度判別システム」などの測定システムの課題を示すものとも考えられる。しかし、調査後に行った教師とのミーティングにおいては、多くの教師がこうした教材の配列と難度との関係について考えたことがなかったと回答したものの、一部の教師からは、文章(テキスト)の難度を測定する指標の設定に興味を示し、測定システムの構築を切望する声を聞くこともできた。本研究では、文章の難度を直接測定することは現時点ではできておらず、学習者である読み手として想定した高校生による「難度に関する意識」を調査したに過ぎない。今後も引き続き、「日本語文章難易度判別システム」などの日本語教育学による測定システムを参考にしつつ、母語者を対象とした判定システムの構築に必要な条件や調査について、引き続き検討することとしたい。また、具体的に高等学校国語科のカリキュラムモデルの構築に着手するまでには至らなかった。コロナ禍により本研究の進捗が阻害されたことに加え、本研究の視野が当初よりも広範なものであることが明らかになったと考えられ、このことも研究成果の一端と考えたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大滝一登
2. 発表標題 高等学校国語科カリキュラムの構築に資する読解テキストの指標について ノンフィクションテキストの難易度に着目して
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大滝一登
2. 発表標題 高等学校国語科カリキュラムの構築に資する読解テキストの特質について ノンフィクションテキストの難易度に着目して
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------